

朝日新聞 2005年(平成17年)2月6日 日曜日 オピニオン

津波記す石碑、正当な扱いに 教員 長尾 武 (大阪市 56歳)

スマトラ沖大地震の大津波はインド洋沿岸国に甚大な被害をもたらした。大阪も過去に大津波に襲われて大きな被害を受けている。1854年の安政南海地震だ。浪速区の大正橋脇に残る「大地震両川口津浪記」の碑がそれを伝えている。

碑があるのは約30年前に知った。当時は人通りの多いところにどっしりと立ち、存在感を見せていた。

今回の大津波でそれを思い出し、碑文をじっくり読もうと出かけたところ、石碑はなくなっていた。辺りを探したが見つけられなかった。あきらめて帰ろうとして橋の北側の人通りないところに移設されているのに気づいた。

付近は工事中で、フェンスに囲まれた碑には近づけなかった。1月30日に再び訪れたが同様であった。大阪は、その約150年前の1707年にも津波で大きな被害が出た。その教訓を生かせなかったことを悔やんだ安政津波の被災者が、後の世に警告を与えるためにこの碑を建てた。

この碑は真に私たちが学ぶべき価値ある歴史教材であり、貴重な文化遺産でもある。一日も早く再び公開され、多くの人に知ってもらう必要がある。